おはようございます。今日はいきなり、「ツタンカーメン王の呪い」についてお話しします。ツタンカーメンというのは、八・九歳というから、小学校三年生くらいで王様になり、十九歳位で亡くなったというエジプトという国の人です。そのお墓から、黄金でできた棺おけやマスク、たくさんの宝物が出てきたので世界的に有名になりました。

お墓の入り口の階段が発見されたのは一九二二年十一月四日。

その日、十二歳の少年が、ロバに乗って作業用の水を運んでいたところ、ロバがつまずいた拍子に水がめが割れ、大量の水がこぼれたのだそうです。きっと、その水が地下に吸い込まれていくのを見て、下に何かあると判断したのでしょう。掘ってみると階段が出てきたという話が、その少年の子孫に伝えられているので、間違いのない年月日のようです。

お墓の入り口には「王の眠りを妨げる者は、死の翼に触れるだろう。」という呪いの言葉が彫られていたのだとか。このお墓を発見したのが、イギリス人ハワード＝カーターさん。このカーターさんに発掘のための資金を提供していたのがイギリス貴族のカーナボン卿。

お墓の発掘が始まったころ、カーターさんの飼っていたカナリヤがコブラにかまれた。コブラは王様の象徴で、よくないことが起きる前兆だというわさが流れ、そうこうするうちにカーナボン卿が原因不明の病気で死亡。死ぬ間際に「ツタンカーメンの呼ぶ声が聞こえる。」と言ったとか、エジプトのカイロ中が停電、真っ暗な中でカーナボン卿は息をひきとった。その頃遠く離れたイギリスで、カーナボン卿の飼い犬も亡くなり、発掘に関係した二十数名も次々に亡くなったというのが、「ツタンカーメン王の呪い」。

私も小学生の頃、「ツタンカーメン王の呪い」の本を夢中で読みました。実際は、カーナボン卿は蚊に刺された跡をひげそりの時に傷つけてしまい、バイ菌が体中に回る「敗血症」で亡くなったことや、お墓の入り口に「呪いの言葉」など無かったこと、真っ先にお墓に入った四人のうち亡くなったのはカーナボン卿だけで、発掘に関係した二十数名が亡くなった事実はないと、現在は分かっています。

『学校実用歳時記』という四十年以上前に出された小学館の本に、「ツタンカーメン王墓跡発掘は、一九二五年二月十七日」つまり今日という記述があります。発掘が始まったのは、最初に話した通り一九二二年の十一月四日に間違いないので、どうも怪しいということで、図書館の五冊の本と家にある二冊の本を調べてみました。学校の図書館にある『ツタンカーメン王の秘密』講談社　青い鳥文庫は、カーターさんの作で、塩谷太郎訳。この本が確実だろうと調べてみると、一九二三年の二月一七日、棺のある部屋にある「金の厨子（ずし）を発見」と書いてありました。

ツタンカーメン王のミイラは、この金の厨子を含め五重の「箱」に入っていて、ミイラは三重の棺に収められていたので、八重に守られたミイラを出すまでにその他の条件も重なり、三年もかかったので、棺のふたが開けられ、黄金のマスクが発見された月日がはっきりしません。ネットの情報では一九二五年十月二十八日と書いてあるものや十一月十一日と書いてあるものとまちまちでした。

古い新聞を調べてみると、一九二五年十一月十五日付の朝日新聞にエジプト十三日発と書かれた記事に「黄金に輝くツタンカーメン王のミイラ　内容すべて判明す」とあり、一九二五年つまり、今から百年前の十一月にツタンカーメン王の黄金のマスクが日の目を見たというのがどうも事実のようです。

古い本を使うと、情報が古かったり、ネットの最新の情報でも内容が間違っていたりすることが多々あります。「本当なのか？」と、情報をうのみにせず、いくつかの資料に当たる慎重さを、君たちが持ち合わせてくれるようになってくれることを願っています。

（立教小学校校長　田代　正行）